



Title	古代印度に於ける靈魂觀念
Author(s)	坂井, 尚夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 1, 1-8
Issue Date	1952
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33111
Type	bulletin (article)
File Information	1_P1-8.pdf



[Instructions for use](#)

古代印度に於ける靈魂觀念

坂
井
尙
夫

古代印度に於ける靈魂觀念

坂 井 尙 夫

印度最古の文献リグ・ヴェーダ・サンヒターを初めとする現存の重要なヴェーダ文献によつて、古代印度の靈魂觀念とその發展の一斑を窺つてみよう。併し豫め次の事實を考慮しておかなければならない。即ち、現存の文献はその當時存してゐたと想像されるものに較べて極めて小部分であつたらうと思はれる。(註)更にこれは特殊の階級——即ち、婆羅門 (brahmana) 階級——の人々により創作或は編輯され、傳承されたことを考へれば、その當時、これ以外、一般の人々の間に、どれ程多くの、又どれ程異つた思想が支配してゐたか、殆んど想像が不可能であらう。吾々の爲し得べきことは、宛も闇夜、廣大な地域の處々に散在する僅かな火の光を結び合はせて、その全體の地形を想像する様なもので、利用し得る文献の解釋に基いて、出来るだけ穩健妥當と思はれる *Brid* を作り上げることである。但し、この *Brid* の穩健妥當ならんことを欲しても、資料の取扱ひ方やこれを構成する者の立場に隨ひ、多種多様となり得るのである。

以下に述べようとする靈魂觀念に就いても、文献の殆んど總てが、特にこれを對象としてゐるものでないから、甚だ不明瞭な點の多いものも止むを得ない。この不明瞭な點を、現在における未開民族の靈魂觀念との類似性により補はうとする試み、例へば、ヴェーダの靈魂觀念に甲乙丙なる要素が認められ、未開民族のそれに乙丙丁なる要素が存する時、前

者にも丁なる要素があつたと推論するが如き見解には、(三) 両者が文化の程度に於て甚だ異り、時代的に極めて距たつてゐるのに鑑み、やゝ穩當を欠くものがある。併し、この兩者の比較研究は興味あり、又、大いに參考となる事は言を俟たない。

さて、ヴェーダにおける靈魂は、その末期に展開されたウパニシャツドの梵我説では、宇宙の本體たる梵 (brahman) と一如たるべき人間の本質——個人我 (*atman, purusa, jiva*) に相當し、又、ウパニシャツド以來、殆んど總ての哲學、宗教の諸派に採用され、印度思想の基調をなしてゐる輪廻説では、業 (*Karma*) を擔つて三世に轉生を續ける輪廻の主體 (*jīga-sukṣma-sarīra, etc.*) に相當する。それ故斯様な點からも、古代印度の靈魂觀念を明かにする事は、印度哲學、宗教の理解に極めて必要である。

最古の文献リグ・ヴェーダは後世の印度思想・文化の源流をなすものであるが、その關心は常に現世にあつた。人々は讃歌を通じ、神に希ふ恩恵は、通常、極めて現實的、具體的である。——即ち、家畜・土地・長壽・子孫等を授ける事を希ひ、勢力の獲得・地位の向上・怨敵の屈服を祈る。隨つて、その性質上、靈魂觀念の理解に資するものは少い。何故ならば、人は現實生活に於ては、それ程靈魂の存在を強く意識することなく、それに對し鋭く反省することも無い。たゞ靈魂の肉體に於ける存在が脅かされたり、又は、それが肉體を去つてしまつたと考へられる時、即ち、人が瀕死の重病に陥り、意識を喪つてしまつた時、又は死んだ時に於て、靈魂に對し、反省が爲され、考察が行はれるのである。隨つて讃歌としては、病人の平癒を祈るもの、死者の葬儀に關聯せるもの等に於て、これを窺知することが出来る。併し乍ら、これに依つて必ずしも統一した、矛盾の無い觀念が得られるわけではないが、少くとも、假令リグ・ヴェーダで肉體と精神とが峻別されなかつたにしろ、人間の

死後、肉體は消滅しても、その人の本質、靈魂は何等かの形で、不滅に存続するものと信ぜられ、假令人は死ななくとも、瀕死の重病に陥つた際など、その精神 (manas 意) は肉體を離れて遠方を彷徨ふものとみられた。(三)

そこで、この靈魂觀念に就いて知る前に、先づリグ・ヴェーダの來世觀を一應みておかう。この時代には火葬(四)と並んで土葬(五)もあつた様であるが、前者が主として行はれ、これが死者にとつて、他界に達する最も普通な方法であつた。

死體は特別に設けられた場處に於て、一定の規定に基き、火葬に附せられるのであるが、アグニ (Agni 火) (六) 神がその死體を煙と共に他界へ運ぶ。而して共に焼かれた山羊等の犠牲獸がその先導者となり、途中死者はプーシャン (Pusan) 神(七)により護衛され、又サヴィトリ (Savitri) 神(八)に導かれしゆくとも云はれ、或は河を渡り、(九)その道は遠く遙けく、人間の先祖ヤマ (Yama) (一〇)が初めて父祖(一一)のためにこれを拓き、又、二匹の犬サーラメーヤ (Saramaya) (一二)がこれを守備すると云はれる。(一三)

この死者の靈の趣く世界は種々な名で呼ばれてゐるが、それに固有の名稱は與へられなかつたものの如く、(一四)善業者の世界(一五)として、不滅の光明あり、太陽の置かれたる世界、(一六)天空の中央に在り、最高天に在り、第三天、或は不滅の光明ある天の幽所(一七)といはれ、又、時に天を三步にして涉るといふヴィシヌヌ (Vishnu) 神(一八)の足跡とも關聯し、神に敬虔なるものは好ましき住居、ヴィシヌヌの最高の足跡に於て樂しむと云はれてゐる。(一九)特に元來それが太陽又はその光明と密接な關係がある事は、(二〇)後のウパニシャッドに於ける解脱者の世界との關聯に於いて注目し値ひする。

この世界では、ヤマ及びヴァルナ (Varuna) 神(二一)が王として君臨し、死者はここで再び、新しい、而も生前に於ける様な如何なる欠陥も

無い完全なる身體を採り、(二二)父母妻子に再會し、諸神及び祖靈と共に永遠の歡樂の生活(二三)を送るのである。要するにリグ・ヴェーダに於ける死後の世界は現世に即して考へられた理想的生活であり、(二四)ここに到るには嚴格なる苦行 (Tapas) をなすもの、戰場で生命を賭して闘ふ勇者の報い(二五)とされ、或は祭祀と淨行(二六)とにより特に前者、即ち祭祀に於いて充分な布施をなした者の報いであるといはれる。

然し一方、悪人の死後趣く世界を如何に考へたか。リグ・ヴェーダに既に後世の様な地獄の考へがあつたか否かは、多くの議論のある所であるが、併し少くも、悪人のために地下に何等かの世界を考へて居た事は推知される。即ち彼等には深い場處、(二七)無間の穴(二八)が考へられ、インドラ (Indra) 神とソーヤ (Soma) 神に對しては「悪人を深淵に、底なき闇黒に陥し給へ。其處より彼等の一人と雖も出で來らざらむがために。」(リグ・ヴェーダ 七・一〇四・三)との祈願が捧げられて居る。併し、いづれにしても、明確にこれに關説してゐる個處は未だ無いのであるが、アタルヴァ・ヴェーダになると、明かに天界、又はヤマの王國 (Yamarajya) に對し、闇黒界とし、地獄世界 (narako lokah) に言及し、(二九)そこでの刑罰としての苦しみ的一端を示してゐる。(三〇)

以上により、リグ・ヴェーダで他界における死者の靈魂が、宛も生前の姿と同じく考へられ、其處での生活を充分享受し得るためには現世における個人的存在の連續でなければならず、何等かの形で總ての感覺器官を具有し、(三一)全體が微細な物質より成り、(三二)宛も煙の如く(三三)風の如く、(三四)或は影の様なもの(三五)と考へられてゐたと思はれる。(古代ウパニシャッドに至るまで、物質的なものと精神的なものとの相異は、粗大なる物質と微細なる物質との相異として考へられてゐた。(三六))

然も、この靈的存在に對しては一定の名稱はなく、葬送の儀禮においては死者そのもの又はその代名詞を以て呼ばれてゐる。來世觀から、以上の様に死者の主體が漠然と考へられて居たのに對し、

同時に、死者の肉體的精神的要素は、これに對應する自然界の各要素へと分散するといふ考へ(三七)が、相互に矛盾を感じることなく存在してゐた。即ち死者に對し、「眼は太陽に往け、氣息(ānman)(三八)は風に往け、而して定めに隨ひ(Charmāna)天に、地に(往け)。或は若し汝に適すとせば水に往け。身體を以て草木に住せ。」(三九)と唱へる。ここで死者の本質をなすもの、「汝」の内容は何であるか明かでないが、何か或る靈的なものが、アグニに依つて他界に運ばれてゆくと思へられ、身體の各機能が自然界に分散するといふことと何の矛盾も感じなかつたらしい。そしてこの靈的なものは、夢眠中に於ても、また重病の際にも、肉體を去つて自由に彷徨するものと考へられ、これが精神作用又は生命の中心をなしてゐると看なされてゐた。以下、リグ・ヴェーダを中心として、これを表はす主な語に就いてその内容を考察する事に依り、靈魂觀念を明かにしてみた。

リグ・ヴェーダでも、既に呼吸が生命に最も重要なものと考へられたため、これを意味するプラーナ(Prāna)、アートルマン(ātman)、アス(asu)等は同時に、生命、生命原理をも指す。このうちプラーナは、元來、呼吸、呼吸を指し、——アタルヴァ・ヴェーダでも同様——全く生理的意味に用ひられ、宇宙的の風に對應し、死後これに融合する。(四〇)アタルヴァ・ヴェーダ以後、次第に重要性を増し、個人の生命そのもの、生活器官中の最勝(四一)のものともみられ、古ウパニシャッドでは(複數にて)諸感覺器官として、死時肉體を去る個人我の一要素を構成してゐる。(四二)

宇宙或は個人の本質として、ウパニシャッド思辨における中心概念をなしてゐるアートルマンは最も古くプラーナと全く同様呼吸を意味し(四三)自然現象の風(vāta, vāyu)と對應し、(四四)更に、生命、活力(四五)人體に於ける生活原理、(四六)自我、本質を意味するに至つた。ウパニシャッドではまた、靈魂、個人我として業(karma)及び(微細なる)感覺

器官等の保持者とみられる。

次にアス(四七)は、呼吸から出た語の(肉體的な)生命で、思考、感覺、意欲との關聯における生命ではない。プラーナが動的に考へられたのに對し、これは靜的に(四八)考へられた。

是等、呼吸から出發した、生命、生活力を意味する語に對し、思考力から出發した語にマナス(manas 意・mens)がある。思考と認識、欲望と意志、歡喜と恐怖の依處としての「ころ」精神である。「汝の心臓に住する、翼ある小さき魂(manaska)」云々、(四九)とある様に、それは恐らく最も古くから心臓にあると考へられてゐた。(五〇)意識を喪つた重病者からはマナスが去つたのである。それは速かに(五一)遠くへ彷徨ふ。死者の支配者ヤマへ、天と地へ、海と山へ、太陽と曉へと。彼のマナスを人は「此處に生きたがため、住まはんがため」呼び戻さうとする。(五二)アスの去つた(五三)場合にも同様である。更に、生と死とは屢々アス、或はマナス、或は双方が止まつてゐるか、去るかの相異に歸せられる。例へば、長壽を祈願して云ふ。「汝のアス身體を棄てざらむ事を、」(五四)或は、「汝のマナスは何處にも行くこと勿れ、失すること勿れ。生ける者より離ること勿れ。父祖を追ひて去ること勿れ。」(アタルヴァ・ヴェーダ 八・一・七)。葬送に際して、生きてゐる者には「彼等のアス、ヤマに行かざらむ事を。」(アタルヴァ・ヴェーダ 一八・三・六二)と、死者には「汝のマナスは自らの處へ行け、而して父祖へと趨け趣け。」(同・二三)と祈られる。又「(死は)アスを父祖のもとへ行かしめたり。」(同・二七)と。更に、「アスとなれる『父祖』」(リグ・ヴェーダ 一〇・一五・一)といふ事が言はれ、アスの意味の決定(五五)に重要な役割をなす。そしてこの場合、アスに於て何か氣體の様な、風の様な、而も anthropomorphic な靈的存在を考へてゐたと(五六)想像される。そしてこの時代、吾人が考へる様な靈魂に全面的に該當する語は無かつたにしても、その觀念は明かに存在してゐたのであつて、プラーナ、マナス、

特にアスに於てその内容を窺知することが出来る。後、これがウパニシヤットで、プルシヤ (puruṣa) 又は (個人的) アートマン (ātman) として表現され、その内容も次第に明かになつて来た。即ち、臨終時の觀察(五七)において、肉體を離脱する靈魂に依つてその内容を知る事が出来る。これによると「識」(vijñāna) を有する我 (ātman) が生氣 (prāṇa) 及び總ての生活機能を伴ひ、更にこれに業 (karma) と、明智 (vidyā) と先慧 (pūrva-prajñā) (五八) が附随すると考へる。一而して、これが後期ウパニシヤットを五九を経て、相身 (liṅgadeha, liṅgasaṁhāra 又は śukṣmāsaṁhāra 又は aṭivāhika) として發達し、ヴェーダンタ派、(六〇) サーンキヤ派、佛教 (即ち antaryāgībhava 「中有」又は gandharva として) プラートナ等の輪廻説或は心理觀に於てそれぞれ重要な問題として考察されてゐる。

- (一) 福島(辻)直四郎・ヴェーダ學の今昔(佛教研究三ノ五、昭和十四年一三一—一三三頁)
- (二) Ernst Arbman: Untersuchungen zur primitiven Seelenvorstellung [LeMonde Oriental, XX (1926) pp. 85—226; XXI (1927) pp. 1—185]
- (三) Egv. saṁh. X, 57—58; cf. Kāty. sr. sūt. XXV, 13, 20.
- (四) 釋儀に關しては、高橋順次郎・木村恭賢著 印度哲學宗教史(東京・大正三年「一九一四」四四—五十四頁 L.v. Schroeder: Indiens Literatur u. Cultur. pp. 41 ff.; H. Oldenberg: Die Religion des Veda, 4. A. 1923, pp. 571—590 詳くは W. Caland: Die altindischen Todten- und Bestattungsgebräuche. Amsterdam, 1896 參照)
- (五) Egv. saṁh. X, 18, 10—13; cf. VII, 89, 1. それ以外に X, 15, 14; Atharvav. saṁh. XVIII, 2, 34 (cf. L.v. Schroeder: op. cit. ib. n. 4; H. Zimmer: Altind. Leben. p. 402); cf. Mbh. I, 90, 17 (Hopkins: Rel. of Ind. p. 364) 後世の祭式の規定は火葬のみに關するもので (cf. Aśv. gh. sūt. V, 1. etc.)、タリニ才以下の乳兒及び苦行者 (parivrajaka, yati, samnyasin) が土葬にされた。(Pār. gh. sūt IV, 1; Vaikh. smārtasūt. V, 10; Manu V, 68—69; Baudh. dh. śās. I, 11, 4; Yājñav. sm.

- III, 1—2, etc.) cf. Caland: op. cit. §§ 49—50 (: pp. 93—95)
- (六) cf. A. Hillebrandt: Vedische Mythologie, 1897. § 35 (: pp. 88—101)
- (七) cf. E. Siecke: Pūshan, 1914; W. Schulze: Pan u. Pūṣan (KZ. XLII, pp. 81 ff.)
- (八) cf. H. Oldenberg: ZdmG. LI, p. 473: LIX, pp. 253 ff.
- (九) Egv. saṁh. X, 63, 10; cf. Śat. br. XIII, 8, 4, 2.
- (一〇) 死者の世界における王者、後世、死神として地獄の王・判者となつたが、一方理想郷としてのヤマの世界の考へは後になつても殘映を止めてゐる。Mbh. II, 9, 1—10. 佛教でも夜摩天と閻魔(焰摩)の二神に別れた。cf. J. Ehni: Der vedische Mythos des Yama, 1889; Die ursprüngliche Gottheit des vedischen Yama, 1896
- (一一) pitar- 元來、父を意味するが、更に (特に複數 pitaras に於て) 祖先、祖靈を指す。
- (一二) M. Bloomfield: Cerberus, the dog of Hades, Chicago, 1905.
- (一三) 以上に就いては、Egv. saṁh. I, 162, 2; 4; 163, 12; 13; X, 14, 1; 2; 11; 16, 1—4; 17, 4. 更に、Atharvav. saṁh. IV 34, 4; XVIII, 2, 21—26; Vāj. saṁh. XVIII, 52 をも參照。
- (一四) アタルヴァ・ヴェーダ以後屢々用ひられてゐる天界 (svarga, svargo lokaḥ, svargaloka-) はリグ・ヴェーダではタリニ度 (svarge, X, 95, 18. cf. Atharvav. saṁh. XVIII, 4, 64) しか現はれず。(これに對し、svar なる語が天界の意に用ひられてゐるが、Egv. saṁh. X, 154, 2, cf. III, 34, 8; IV, 3, 8; VIII, 87, 3; IX, 86, 14) 祖界 (pitṛloka-) 神界 (devaloka-) はいづれもアタルヴァ・ヴェーダ、或はそれ以後であり、人間界 (manuṣya-loka-) は通常は勿論この世界を指すが (Śat. br. XIII, 2, 4, 1) 時に月 (candramas) を以て人間界とし、人間が(死後) 趣く世界を意味してゐる事もある。Jaim. up. br. III, 13, 12, cf. III, 14, 7.
- (一五) sukṛtīm uloka. Egv. saṁh. X 16, 4; Atharvav. saṁh. III, 28 6; IX, 5, 1; XI, 1, 17; XVIII, 3, 71 etc.; Vāj. saṁh. XVIII, 52.
- (一六) Egv. saṁh. IX, 113, 7.
- (一七) 以上 Egv. saṁh. X, 15, 14; X, 14, 8; IX, 113, 7—9; アタルヴァ・ヴェーダでも略々同様に考へられ、最高 (XI, 4, 11) 輝ける世界 (IV 34, 2) 蒼穹の背 (XVIII, 2, 47) 第三の蒼穹 (IX, 5, 1; 8; XVIII, 4, 3) 第三の天 (XVIII, 2, 48) 又、マイトライキヤニ・サンヒターでは祖靈の住むところを第三の世界とも云つてゐる I, 10, 18 (: Kāth. saṁh. XXXVI, 12); II, 3, 9 (: Kāth. saṁh. XII, 11)

(一六) cf. A.A.Macdonell : JRAS, 1895, pp. 165 ff. ; id. : Ved. Myth., 1897, § 17 (: pp. 37—42)

(一七) Rgv. samh. I, 154, 5.

(一八) cf. Rgv. samh. I, 109, 7; IX, 113, 9; X, 107, 2; X, 154, 5; Taitt. br. III, 9, 10, 11 : Śat. br. 1, 9, 3, 10.

これに對し、星との關係はそれ程密接でなく (Rgv. samh. I, 125, 6 : X, 107, 2; v. Taitt. br. 1, 5, 2, 5) 太陽聖典、特に七章 (sapta-r̥ṣayas, cf. septentriones) は天に昇り、星になつたといはれる。Rgv. samh. X, 82, 2; Śat. br. II, 1, 2, 4; Taitt. ār. I, 11, 1, 2 (v. Mbh. III, 42, 32—39); Taitt. samh. V, 4, 1, 3; Śat. br. VI, 5, 4, 8.

cf. H.Oldenberg : Rel. d. Veda. p. 565, n. 3.

Barth : Rel. of India. p, 23, n. 2.

(一九) cf. A.Hillebrandt : Varuṇa u. Mitra. 1877; G.Dumézil : *Oópa-vós*. Varuṇa 1934.

後世のケアルナの世界に就いては Mbh. II, 9, 1—30 を参照。

(二〇) Rgv. samh. X, 14, 8; 16, 5; 56, 1; Atharvav. samh. VI, 120, 3; III, 28, 5; XVIII, 2, 26; cf. Śat. br. IV, 6, 1, 1; XI, 1, 8, 6; XII, 8, 3, 31; Jaim. up. br. III, 3, 5. この意味より禽獸、又は虫類が死體を傷めることを怖れ、或はその一つ一つの骨が重要視されたことが省かれる。cf. Rgv. samh. X, 16, 6; Āśv. grh. sūt. IV, 5, 1 ff.; Katy. śr. sūt. XXI, 3, 7 ff.; Śat. br. XI, 6, 3, 11. 更に、或る特殊の祭式を知る者は、具身のまゝ、天界に達するとも云はれる。Taitt. br. III, 11, 7, 3.

(二一) Rgv. samh. IX, 113; X, 14, 7; 8; 15, 11; 16, 2; 5; X, 135; Atharvav. samh. IV, 120, 3; XII, 3, 17.

併し、この世界は、必ずしも天界にあると考へられてはをらず、ヤマは地下にあるとみられる點が、既にリク・ヴェーダに認められる。cf. H.Oldenberg : Rel. d. Veda, pp. 545—548; E.Arbman : Tod und Unsterblichkeit im vedischen Glauben (Archiv für Religionswissenschaft, Uppsala, XXV, 1927, pp. 339—387; XXVI, 1928, pp. 180—240) (但し、これに對しては、W. Wüst : Orientalische Literaturzeitung, 1930, Nr. 1, col. 64—68 を参照)

(二二) この世界をあまりにも現代的にみたため、後に至り、この世界で再び死ぬといふ恐怖が起つて來た。そしてこの再死 (punarmṛtyu) の防止がブラーフマナ神學の最大關心事となつたのである。

cf. Taitt. br. III, 11, 8, 6; Ait. br. VIII, 24—25; Kauṣ. br. XXV, 1; Śat. br. II, 3, 3, 9; X, 1, 4, 14; X, 2, 6, 19 (cf. E.Windisch : Buddha u. Māra, p. 189, n. 1); X, 5, 1, 4; XI, 4, 3, 20; XI, 5, 6, 9; X, 6, 1,

4 ff. そして古代ヴェーダに於けるこの傾向は殘存してゐる。Bṛh. ār. up. I, 2, 7 (Śat. br. X, 6, 5, 7—8); I, 5, 2 (Śat. br. XIV, 4, 3, 7); III, 2, 10 (Śat. br. XIV, 6, 2, 10)

(二三) Rgv. samh. X, 154, 2—5.

(二四) iṣṭāpūrta- Rgv. samh. X, 14, 8; cf. Vājsamh. XVIII, 64. cf. E.Windisch : Festgr. an O.v. Böhtlingk, 1888, pp. 115—118; M.Bloomfield : AJPh. XVII, pp. 408 ff.

(二五) Rgv. Samh. I, 154, 3; I, 125, 5; X, 107, 2.

(二六) Rgv. samh. IV, 5, 5 (apud Śāyana) 但し、これには異論がある。(K.F.Geldner : RV.Übers. ; H.Oldenberg : Noten [ad locum] 等)

(二七) Rgv. samh. VII, 104, 17.

(二八) Atharvav. samh. V, 3), 11; VII, 2, 21; V, 19, 1 ff.

(二九) cf. e.g. Taitt. br. II, 4, 6, 6.

(三〇) Atharvav. samh. V, 19, 3.

(三一) 火葬では總て煙となり、骨のみが残るから、死者の體は他界では骨なくしてあらゆる供養を享受し得るとも考へられてゐる。Atharvav. samh. IV, 34, 2; cf. Chānd. up. VI, 5, 3.

(三二) 以下に述べる *asū* が概念上「靈魂」に最も近い要素をもつてゐると思はれるが、これは *prāṇa* といふと同視され、風、或は *hauchartig* なものとして考へられてゐた。cf. Mahājdhara ad Vāj. samh. XIX, 49 (Rgv. samh. X, 15, 1); *asūṃ ya iyuḥ* = *ye caṣuṃ prāṇam iyuḥ, vātātmano vātārūpaṃ prāptuḥ*.

(三三) 屍體の毀損に對する配慮 (cf. Rgv. samh. X, 16, 6; Atharvav. samh. XVIII, 2, 26; etc.) はその Schattenseele に關するもので、この可見の肉體そのものが、直ちに他界へ行くとは考へられない。参照 Śat. br. X, 4, 3, 9; II, 1, 3, 4 (II, 1, 4, 9); II, 2, 2, 14. 但し、これと反對の思想のあるのも看過出来ない。(cf. Taitt. br. III, 11, 7, 3; Pañcav. br. XXI, 4, 3)

(三四) Chānd. up. VI, 5.

(三五) 次に擧げたりク・ヴェーダの側面以外に、Atharvav. samh. XVIII, 2, 7; cf. Rgv. samh. X, 58, 7; Śat. br. X, 3, 3, 8; Rgv. samh. X, 90, 13; 14; Atharvav. samh. V, 9, 7; Ait. br. II, 6, 13; 後世でも肉體が死後、原素に分解すると考へた事は死ぬ事を *pañcatvam gam* (五大に歸す) と言ふのでも知られる。

(三六) = *prāṇa* (Śāy.); = *die Seele* (Geldner), cf. Rgv. samh. X, 90, 13; Atharvav. samh. V, 9, 7.

(三七) Rgv. samh. X, 16, 13.

- (四〇) Ṛgv. saṃh. X, 90, 13; Atharvav. saṃh. V, 10, 8; V, 9, 7.
 (四一) prāṇasaṃvāda, v. Chānd. up. V, 1, 6—12; Bṛh. ār. up. VI, 1, 7—13; Kauṣ. up. II, 14, cf III, 3; Ait. ār. II, 1, 4; Praś. up. II, 2—4.
 (四二) Bṛh. ār. up. IV, 4, 1—2 (=śat. br. XIV, 7, 2, 1—3) 但しこれは解脫者の(個人)我には随伴しないと解される。cf. Bṛh. ār. up. IV, 4, 8 [M]; III, 2, 11.
 (四三) Ṛgv. saṃh. X, 92, 13; X, 97, 4; X, 16, 3; X, 168, 4; VII, 87, 2; I, 34, 7; Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 7.
 (四四) Ṛgv. saṃh. X, 16, 3; 13; Atharvav. saṃh. V, 9, 7; Ait. br. II, 6, 13.
 (四五) Ṛgv. saṃh. IX, 2, 10; 6, 8; X, 121, 2; Atharvav. saṃh. VII, 111, 1; XVI, 3, 5; śat. br. XIV, 3, 2, 5.
 (四六) これは宛も氣息の様なものと考へられてゐる。cf. śat. br. X, 6, 3, 2.
 (四七) v. W. Neisser : Zum Wörterbuch des Ṛgveda, Leipzig. I. Heft, 1924, pp. 137—138; II. Heft, 1930, pp. 26—29.
 (四八) Atharvav. saṃh. VI, 104, 1; Ait. br. II, 6; śat. br. VI, 6, 26, cf. II, 4, 2, 21.
 (四九) Atharvav. saṃh. VI, 18, 3; 参照〔トケニ對し) そのうちに心臓中のわが心を尋け〕〔Āśv. gṛh. sūt. III, 6, 8)
 (五〇) E. Windisch : BksGW. 1891, pp. 163 ff.
 (五一) 「アナスの如く速かなる」(Gedankenschnell, swift as thought) は最も速かなことの形容として常に愛用される。
 cf. e. g. Ṛgv. saṃh. VI, 62, 3; I, 23, 3; 117, 15; IV, 26, 5.
 (五二) Ṛgv. saṃh. X, 58. このアナスに就いては既に gatamanas “bewusstlos” Taitt. saṃh. VI, 6, 7, 2; Mait. saṃh. IV, 7, 2; Kāṭh. saṃh. XXIX, 2 を参照。
 (五三) itāsu “bewusstlos” : Taitt. saṃh. II, 1, 1, 4; VI, 6, 7, 2; gatāsu “tot” Ṛgv. saṃh. X, 18, 8; Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 59; śat. br. V, 2, 4, 10. parāsu. vyaśu “tot” はクラシックのみ。
 (五四) Atharvav. saṃh. VIII, 2, 26. (cf. 27) 又 Atharvav. saṃh. VIII, 1, 1; 15; V, 30, 1 をも参照。
 (五五) これに關聯しては, asunīta- (Atharvav. saṃh. XVIII, 2, 56) asunīti, (Ṛgv. saṃh. X, 16, 2; 15, 14; 12, 4; 59, 5; 6; Atharvav. saṃh. XVIII, 3, 59) に一言しておかなければならない。
 これはいつでも文字通りでは、「アスの速びき」であるが、一方、「他界への移

行」從つて「死」を意味し、他方、「靈の誘導者」(Seelengeleit, Psychopompos) 從つてこれに當るヤア或はアケニ神が考へられる。

cf. Arbmann : op. cit. II, pp. 29—42. 更に〔註 四七〕参照。

(五六) Nir. XI, 18: ye prāṇam anvīyuh; Durga ad locum : prāṇamātramūrtayaḥ, asthūlavigrahāḥ; Śāy. ad Ṛgv. saṃh. X, 15, I : asum, asmat-prāṇam īyuh, rakṣitum prāptāḥ; Mah. ad Vāj. saṃh. XIX, 49: ye cāsum prāṇam īyuh, vātātmano vātārūpaṃ prāptāḥ; Śāy. ad Atharvav. saṃh. XVIII, 1, 44: ye 'sum prāṇam īyuh prāṇopalakṣitam liṅgaśarīraṃ prāptāḥ.

(五七) Bṛh. ār. up. IV, 4, 1—2 (=śat. br. XIV, 7, 2, 1—3); cf. Chānd. up. VI, 15, 1—2; Kauṣ. up. III, 3—4.

(五八) 以前(前世?)に爲した善惡の業に對する潜在意識か。
 cf. śaṃkara ad loc. ; Dvivedagaṅga ad śat. br. XIV, 7, 2, 3. ; Deussen : Syst. d. Ved. pp. 405—406.

(五九) cf. Kāṭh. up. II, 6, 8; śvet. up. VI, 9; Mait. up. VI, 10; Sarvop. sāra 16

(六〇) cf. Ved. sūt. IV, 2, 6—11; III, 1, 1—6. (I, 4, 1—7); śaṃk. ad loc. ; Vedāntas. §§78—122; Śaṃ. kār. vv. 38—40; Śaṃ. sūt. III, 7—16.